The First World War

Michael Howard　著

馬場優　訳

法政大学出版局

２０１４年初版

150781025　柴田尚暁

目次

１、１９１４の各国の背景
２、各国の背景
３、２つの同盟
４、結論

I,第一次大戦の起因

1,ヨーロッパの諸大国の野心と恐怖心が原因

→ヨーロッパの紛争として開始

a,カール・フォン・クラウゼヴィッツの言葉

→戦争とは

i,政府の政策

ii,軍事行動

iii,人々の熱気の三位一体からなる

Ⅱ,各国の背景

1,イギリス王国

a,産業革命の成功、国民の増加

→国内での資源食糧の自給不可能

→制海権の守備が国家の根幹に

b,人口約４０００万

2,フランス共和国

a,フランス革命で支配層から小作農に土地

→土地に固執、経済発展の妨げ

b,不安定な国内政治（政治的準内戦）

c,プロイセン帝国の強大化

→ロシアとの関係強化

d,人口約３５００万

3,ロシア帝国

a,資本主義と工業化到来の遅滞

→外国の資本と専門知識がメイン

→旧態依然な絶対専制主義的統治

b,官僚制の「西欧派」対「スラヴ派」

c,代議制の導入もテロ活動の恐怖増大

→恨みの連鎖

d,日露戦争後、東南ヨーロッパに注目

→バルカン半島でハプスブルク家と対立

e,人口約１億６４００万

4,オーストリア＝ハンガリー帝国

a,外交、軍事、財政の共有

b,他民族国家ゆえの不団結

c,大民族から少数民族への熾烈な支配

→マジャール人からスラヴ系人など

5,ドイツ帝国

a,軍国主義

→普墺戦争、普仏戦争が建国の要因

→軍事力の強化が最優先

b,大きな野心

→工業力向上、人口増により世界強国渇望

→イギリスとの対戦

c,漠然とした不安

i,共産主義への恐怖から団結

d,人口約６０００万

Ⅲ,2つの同盟

1,普仏戦争後の独、仏と同盟国の露と接近

→三帝同盟（普墺露）

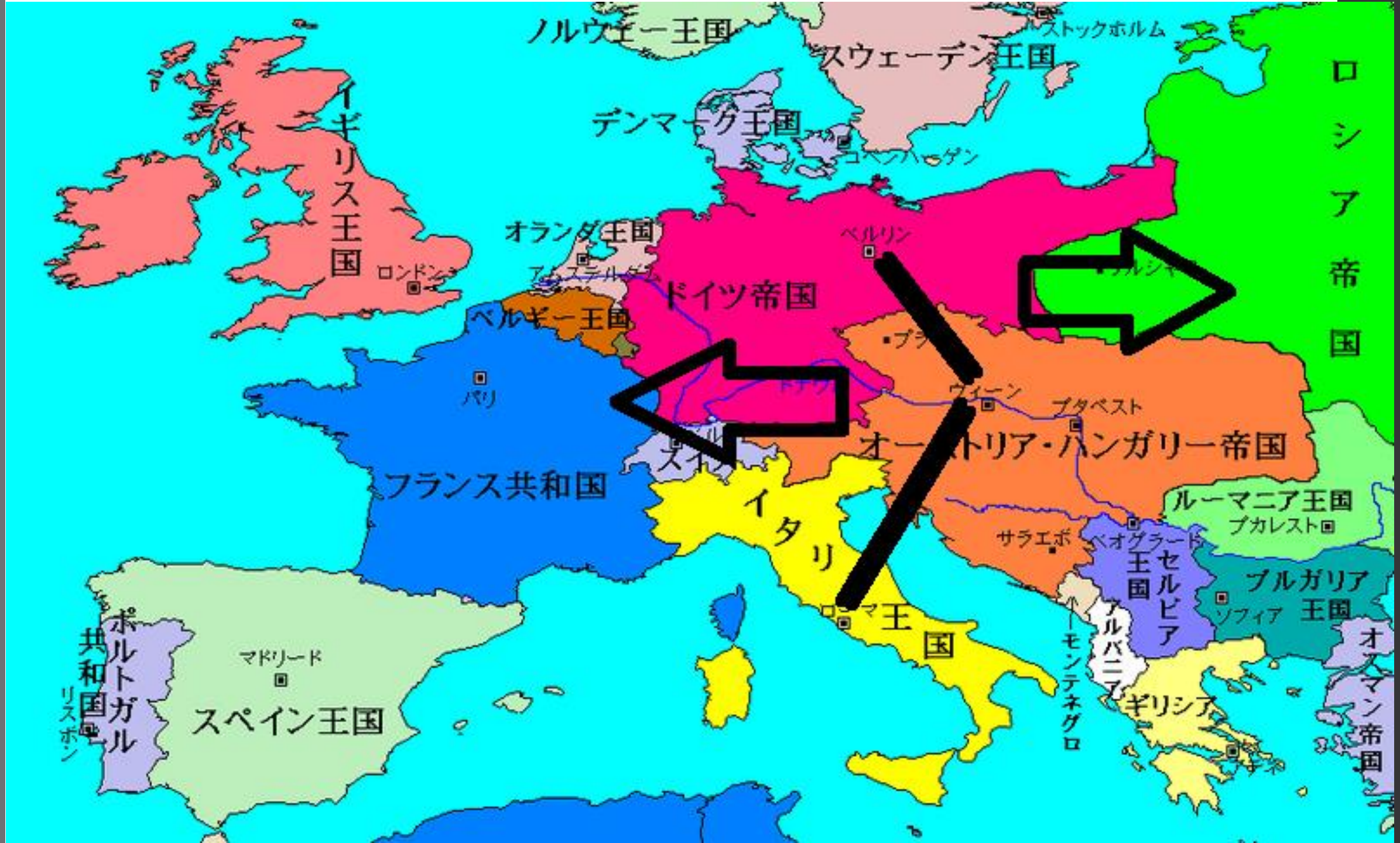
→i,英仏の植民地獲得合戦の激化の方向

ii,中立の立場

→フランスの孤立化、計画

2,普、伊の仏の地中海沿岸の領土要求を支持

→普墺伊三国同盟で仏包囲


ノルウェー王国
ストックホルム
スウェーデン王国
ロシア帝国
イギリス王国
デンマーク王国
コペンハーゲン
オランダ王国
ベルリン
ロンドン
アムステルダム
ドイツ帝国
ベルギー王国
パリ
ウィーン
ブダペスト
オーストリア・ハンガリー帝国
フランス共和国
ルーマニア王国
ブカレスト
サラエボ
ベオグラード
セルビア王国
ブルガリア王国
ソフィア
イタリア王国
アルバニア
モンテネグロ
ギリシア
オスマン帝国
ポルトガル共和国
リスボン
マドリード
スペイン王国

3,バルカン半島の不安定性

i,バルカン半島の勢力、墺露で二分割案

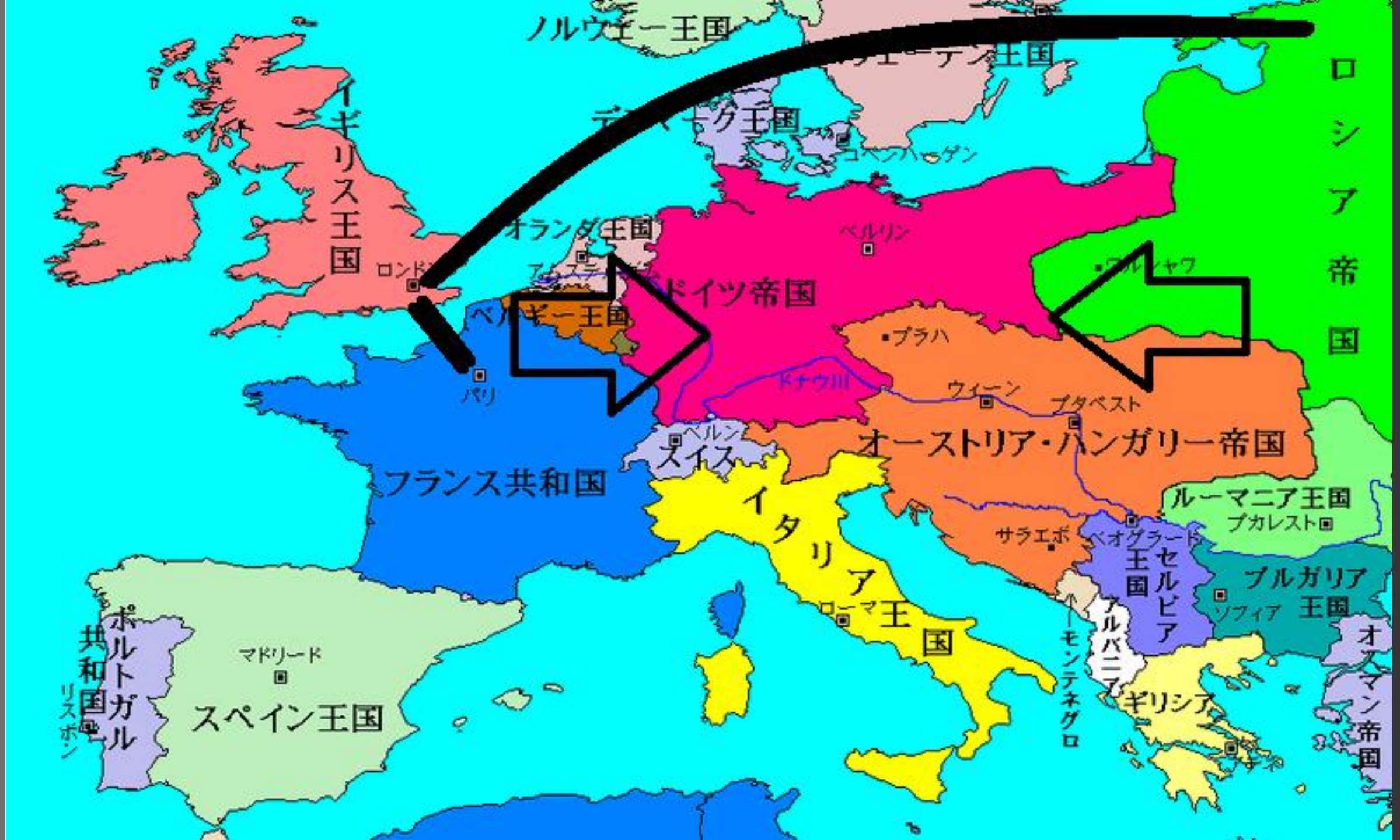
→ボスニア＝ヘルツェゴヴィナの「保護権」

4,カプリーヴィ政権の再保障条約の未更新

→露仏同盟締結

5,海軍増強の独への対抗

→のちの英仏露三国協商へ


ノルウェー王国
スウェーデン王国
ロシア帝国
デンマーク王国
コペンハーゲン
イギリス王国
ロンドン
オランダ王国
アムステルダム
ベルリン
ドイツ帝国
ベルギー王国
ワルシャワ
プラハ
ドナウ川
ウィーン
ブダペスト
パリ
ベルン
スイス
オーストリア・ハンガリー帝国
フランス共和国
ルーマニア王国
ブカレスト
サラエボ
ベオグラード
セルビア王国
ブルガリア王国
ソフィア
イタリア王国
ローマ
アルバニア
モンテネグロ
ギリシア
オスマン帝国
ポルトガル共和国
リスボン
マドリード
スペイン王国

6,バルカン戦争

i,バルカン半島のオスマン帝国を大方駆逐

→セルビアの人口約2倍に

→ボスニアの併合反対派、

オーストリア皇太子を暗殺

（サラエヴォ事件）

→第一次世界大戦へ

Ⅳ,結論

1,戦争は各国の恐怖心から発生

2,集団安全保障は有力、

それだけでは戦争は防止は不可能